

---

# めだかボックスのおはなし 2

キイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

めだかボックスのおはなし2

### 【Zコード】

Z0746Z

### 【作者名】

キイナ

### 【あらすじ】

あるおんなのこのおはなし。

『アーティスト一覧』（前書き）

1とは関係ない。

『ルーデモード一ヶ流』

「んー。あー。今何時かなー」

少女はベッドから起き上がりながらいまま、時計を確認した。

時計は午前6時前を指していた。

「んー…………。みつひりす」

面倒くねりついに立ち上がると大量の制服が入っているクローゼットから制服を出した。

少女はそれをしばりく見つめると、嫌々着た。

「そーか。今日は新生徒会長の発表があるんだっけ。ビーでもいーけど

『ビーでもいーけど』

それが彼女の口癖だった。

少女はそのまま、朝、飯を食べることなく、家を出よつとした。

『こつてきまーつす』

少女はそれだけつぶやいて、扉を開けた。

『死—でもいーかん』（後書き）

『完全完璧』

この世に存在する能力全てを使用可能。

そういう物語を作りたとしたけど、やめた。

『とても奇妙な

ほんのり明るい空を見上げながら、少女は呟いた。

「 もう少し早く家出ればよかつたなあ」

今はもう6時頃。

学校へ行くのに早めに起きていた。

少女はゆっくり、ただゆっくりと歩く。

少女の外見に、その制服がとても似合わなくて。

少女は血氣もどりも血氣もどりも見しきにひじかつた。

「あー、やだやだもひともしな制服なにのかよー」

ぐねつぐねつと少女が回つ、そして、その度に彼女の耳に髪が揺れる。

「やっぱ、髪が崩れる……」

少女は髪を抑えて止まつた。

まるで少女の髪型ではないよつな、それはまさに『オールバック』とかいう類だらう。

しかし、少女には異常なほど似合っていた。

「あーあーあー。また遅れちゃつぜー。しつかたない、早めるかー。  
まあ、どーでもいいけど」

そういうながらも、少女はぐるぐるぐるぐると回った。

見えてきた、『箱庭学園』が。

少女の名前は白神燕。

とても奇妙な人間であった。

## 『気持ちだけ』

燕が学園に着いた時、もつすでに生徒達は随分登校してきていた。

「やつたね、遅刻じゃなーい。」

と、校門をジャンプして通りひとした時。

「ちよーっと待つたあーー！」

「あん？」

「な、なんなんですか、その髪型はー正しくありませんーふさわしくありませんーん！」

「ああ、誰？」

「風紀委員の鬼瀬針金です！…今すぐ止してくださー。」

「「」めんなさいね。先輩だか、同級生だか分らないけど、これねー。無理なんだよ」

「なななんど「」とですかーいいから今すぐこ…………」

「だーかーらー。逆に聞くけどー。出しこいつどんな感じなのー？」

「それは…………」

「具体的によひへー」

「ますですね……………そのオールバック……………ですか？それをどーにかしてください！それからその髪の色…それを……………」

「ああ、これね、地毛」

「地、地毛！？」

鬼瀬が若干後ずさる。

「ああでも髪型のことば『気持ちだけ』受け取つておきまーつす」

それだけ言つと、ひらりと鬼瀬を避け、さつと学園の中へ入つてしまつた。

「な……………なんなんですか……………？あの人……………」



『気持ちだけ』（後書き）

髪の色と田の色は、絶対一緒。

これは絶対。

『正反対だね。』

パチパチパチ……

拍手が鳴り響く体育館で、燕は隅っこの方で体育座りをしていた。

「生徒会長、黒神めだかかあ。つーん」

「私と、正反対だね。」

「！？」

めだかが、何かに反応した。

「どーでもいいんだけどね」

燕は立ち上がり、スカートを軽く手で払つた。

「やれやれ、これからどうしたが。また理事長さんと一緒に行かなきゃだね」

燕は、一人で体育館から出た。

めだかは、燕が見えなくなつても、燕が居た場所を見つめていた。

「めだかちゃん、あまり私を怒らせないよ!」

燕が体育館から出るととも、そんな言葉をぼそりと発した。

「ふむ、どうやら、厄介な生徒がいるようだな  
……」

『冗談でしょ』

「理事長ー？」

「ああ、燕さんですか。どうぞ」

理事長と呼ばれるその老人は、燕と自分のお茶を用意しながら、燕の入室を促した。

「理事長。私の教室は、こつになつたら造つてくれるんですかねえ」

「ええ、例のアレに協力してくれたら、どんな教室でもお造りしますよ」

微笑みながら老人はお茶を飲む。

「あつそう、なんか交換条件みたいなの、私、嫌いなんですけど」

「そう言われましても、わたしにだつて譲れないものはあるんですよ」

「…………へー…………。格好いいじゃん」

「わかったわかったわかりましたよ。協力？でしたっけ。すればいいんでしょ」

「あつがといわざれこまか」

「ただし、あくまでも、協力。ですから」

燕は立ち上がり、ドアへ向かった。

「それから…………制服。ビーにかならないんですかね」

「生徒会に入ればいいんじゃないですか？」

「…………[冗談でしょ】

静かになつた理事長室で理事長はため息を吐いた。

## 『姉ちゃん』

「やれやれよひひしそ」

燕が起きたのは午前5時を少しすぎた頃。

「たまには朝ご飯、食べて行ひつかな……」

妙に綺麗なテーブルを見て、燕は言つた。

もぐもぐとパンを食べながら、先程着る為に壁に掛けた制服を見て、燕はため息を零した。

やはり制服だけはどうとも諦め切れないらしく、ここ最近ずっと悩んでいた。

「もひー回理事長に相談してみよつかな…………」

やはり、ため息を吐いた。

「5時30分……。そもそも行こうかな

立ち上がり、制服を着て、玄関に向かつ。

ふと、玄関の棚にある[♪真立てを見つめて。

「姉さん……」

一言だけ、呟いた。

『危ないからね

廊下をふらふら歩いていると、何やらもぐもぐと口を動かしながら近づいてくる人物がいた。

「…………誰？」

「あひやひや、あたしは不知火半袖！」

「へー。それで？」

「あんたさあ。何がしたい？」

「は？」

「なんでだろうねえ。どーしてもあんたにこの学園から出つてって  
もらわないといけない気がすんのや」

不知火は、手に持つている袋から食材を取り出しながら言った。

「おじいちゃんから聞かなかつた？私をあんまり怒らせないほつが  
いいって」

「知つてたんですか 理事長があたしのおじいちゃんだつて

「まあやつこいつ」と

「生徒会に気を付けな。危ないからね」

「どーも

燕は手を振りながら、去つて行った。

「変な奴っ

『仕方ないなあ』

「水中運動会?」

燕はまた理事長室に居た。

「ええ、また何か始まるようですねえ」

「ふうん。どーでもいーけど

「どーでもよくはないんじやないんですか、燕さん」

「なんだっけ、ああ、不知火か」

燕の横にすわる不知火。

「まああれだね、わたしは出ないしー。関係無いしねー」

「まあまあやつらがここ 見に行くだけ行つたらー?」

「仕方ないなあつ」

「ついでに、生徒会の方とも仲良くなれるのも良いですよ。  
何か、『要望』はありますか?」

理事長が聞く?

「要望?…やつだなあ……」

『補欠』

「生徒会に、入りたい」

「…………なるほど…………」

理事長は、冷静を装いお茶を飲んだ。

「いいでしょ。生徒会長には、私が連絡しておきましょつか?」

「あー。よろしくお願ひします。それと…………」

「それと…………?」

「私はただ、入りたいだけ。私がなりたいのは、『補欠』」

『補欠』

「…………ええ、わかりました。お話、しておきましょ。」

「どうも」

理事長は、意外な発言をした燕にひとつ、質問をした。

「もしや、例のアレも、補欠、と？」

「もちろん」

「ヤリと笑つて、燕は立ち上がつた。

「大丈夫。協力はしますよ」

もう一度笑うと、燕は出て行つた。

『人を、人間を』

「と、言つ訳でー、今日からこの白神燕が、生徒会役員補欠でーす。  
どーぞよろしく」

「どーいうわけだよ！」

生徒会役員庶務の、人吉善吉のツツコミを聞いて、とても嫌そうに  
善吉を睨む。

「理事長から聞いてねえのかよ…………。全く…………」

「…………ああ、そういうば、なんか来るとか、言つてたな。お前が  
そつか…………」

「物分りいいー」

とても面倒くさそうに答えて一ノ二ノ三と笑う燕は、今までの燕とま

るで別人だった。

「俺は庶務の人吉善吉だ。よろしくな

「俺は書記の阿久根。よろしく

あれー?なんだかなあ。

何ちょっと格好つけてるんだろうか。

この人プリンスなんじゃないのー?

「私は白神燕、どーもめだかちゃん。駄かつたね。『私と会えて』。

「あー、ビーでもこーなび。

「私は白神燕、どーもめだかちゃん。駄かつたね。『私と会えて』。

「

「…………。」

「まあ、ビーでもこーなび

「どうでも良い訳が無いだろ。貴様は、何故私とそんなにも違つ  
ついたんだ？」

「やつて思つてゐるだけ、ずうーっと違つままだよさ

しばらく、沈黙が続いた。

そして、その緊張を破つたのが、轟拍だつた。

「なんなんだよ…………。お前、何がしたいんだよ…………」

燕は、これまでにない笑顔で言った。

「人を、人間を好きになりたい！！！」



『捨て置けなれ』

しばらく、沈黙が続いたとして、善吉が口を開いた。

「意味わからねえよ、お前

「うわせつかく真面目に答えたんだけどなあーー。」

不機嫌そう元気叫ぶといへるりとめだかを振り返った。

「めだかちゃんー。私とあなたは、違う。だからこそ、会えて良かつた、かな」

ここに」と、楽しいのか楽しく無いのか分からない表情で、燕は語り続ける。

少しだけ、戸惑つそぶりを見せながら。

「私が考えただけで、根拠は無い。けど、私が話したいから、話す。  
いいでしょ？」

めだかが、答えた。

「…………ああ、貴様も今日から生徒会役員だ。思つ存分吐き捨て  
るがいい……！」

「捨てはしないたれ、ただ…………少し理解はして欲しい」

燕は、  
強wajう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746z/>

---

めだかボックスのおはなし2

2012年1月14日21時45分発行